
ネガティブに行くぜ！

光琳寺 凪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネガティブに行くぜ！

【NNコード】

N9447C

【作者名】

洗淋寺 風

【あらすじ】

部活を辞めたい少年達男は、自殺をしようとする。全ては部活を辞めるために・・・

八月××日、午後三時四十分に……オレは自殺する！

*

オレの家は、貧乏でなく、金持ちでもないという中途半端な位に立つ家であった……そんな家に仕立てたのは、父親だ！

オレの父親は、会社を持つている。「ヒッドペーパー（神紙）なんて名前の、しゃれにしても面白くもなんともない広告代理店だ。父親は、毎日夜遅くまで働いているのだが、ちっとも会社は大きくならない。

そんな父親が、オレは嫌いだ……いや、仕事の事はどうでもいいのだ。嫌いな理由は、別の所にある。

「おい、達男！」田をつむるだけで、ある事に対する父親の叱り声が頭に反響する……父親が、オレ叱る理由のある事とは「部活」である。

話すと長くなるが、まあ短く話そう。

オレの父親は小学校の頃入っていた少年野球チームの監督であった。その時の父親は、失敗ばかりするオレに物凄い恐かった……。それからオレは野球がどんどん嫌いになつていった……。そして時は経ち、オレは中学生になった。しかし父親の手が届かない中学校へ入った今も、オレは、野球をやめる選択権を得られなかつた。だから父親の手が届かない所へ入つたのは正解だつた。オレは毎日部活をさぼつた……。

そんなオレにも夢は有つた……もちろんプロ野球選手や大リーガーなどという物ではない。

そしてオレの学校は、夢有学園といい、いかにも夢有りそうな、名前である・・・・・そして、オレの夢は作家に成る事であった。だからオレは文芸部に入りたかった。しかしこの学校には文芸部は無い。最終手段で部活をつくるうと思ったのだが、最近部活をつくれるのは高校生だけだということが分かつた・・・・

だからしかたがなく、嫌々野球部を続け、サボリ続けていたのだ。そう、オレが部活をサボルのは、全て学校が悪いのだ・・・・・しかし最近ではばれるのは時間の問題であり、我慢の限界であつた。

なのでオレは父親に野球部を辞めたいと告げた・・・・しかし父親は、ちゃんと頭を下げるオレをじやー、しょーには野球部を辞めるなり、学校も家の子も辞めると聞こ出した。

むかついたオレは、憂さ晴らしに友達に、メールした。

「今日ね、父親に部活辞めたいって言つたらさー野球部辞めたいなら学校も家の子も辞めろって言われちゃつた（＼＼＼＼＼）もう本当どうしよう（Ｔ・Ｔ）」と打つた＼＼＼＼＼しかしメールは、なかなか帰つて来ない。もう諦めて寝ようとした時、オレの携帯は鳴つた。帰つて来たメールは、結構長文だつた＼＼＼＼＼

「結局はお前が決めるんだよ。どんな選択をとってもお前の頑張り
ようでどうにでもなる。それと一つ聞くけど、お前自身野球をやつ
てて楽しいといえるのか？ 嫌嫌やつてるならヤメチマエ。辛いから
だとか、ツマンナイからだとかいう中途半端なら辞めたほうがマシ
ダよ。んまあ部活」ときで逃げてるようじやこれからも辛いことか
ら逃げる人間になるんだね（・・・）最後に、親父さんにやら
されてるとかじゃなくて、自分自身の為に野球を続ける！－つてい
う考え方してた達男のが好きだな俺は（ ）んまあお前が結論
だして親御さんに言え。納得してもりうまで頭下げ続けるんだよ。
それくらいの根性だせよな（－）漢おとこだろ！－「・・・・・長か
つた。

アホか・・・・オレに頭下げるつて?冗談じゃない。

どうせオレは逃げ続けますよーだ！自分の人生だ、自分で決める・・

・別にプロ野球選手になりたいわけじゃないんだ！なのに何故オレが野球をしなくちゃいけない！ふざけるな・・・・・自分のために野球をするオレの方が好き？別におまえに好きになつてもらいたかねーよ！ていうかおまえも男だろつて・・・・・

「・・・・・はあ」思わずため息が出る。

もう本当にどうしようか・・・・少なくともオレは部活よりも勉強の方が楽しい・・・・普通は逆でなければならない物だ・・・・・しかしそんな事を父親に言つた所で意味が無い。どうせあの人のがだ、

「俺だつて学生の時は同じ気持ちだつたよ」とか言って辞める事を許さない。なんと頑固な野郎だ。

話しさは変わるが、人生がつまらなくなつた人間や、人生から逃げたくなつた人間は、大体同じ行動をとる・・・・・・・もう少しで夏休みだ！そこでオレはある、プロジェクトを立てた。その名も、

「自殺に見せかけ未遂に終わり、自殺理由を野球部の事にして（ま、実際にも野球部のせいなんだが・・・）同情をかい、見事ハッピー工ンドを迎えるプロジェクト！！」という、名前だけで何をするのか分かる、長い長い名前だ！

まずはネットで親がいらない時間を狙い、一番楽な、死に方を調べた。何故一番楽な死に方なのかは、未遂に終わらせ、意識が戻った時に、どうして一番楽な死に方をしなかつたのか聞かれるのが嫌だつたし、死ぬつもりも無いのに苦しむのは嫌だつたからだ・・・・・

二・三時間で、一番楽な死に方は、首吊りか一酸化炭素中毒らしい・・・・一酸化炭素なら近くのホームセンターで練炭でも買えばいいから楽そうだ・・・・でもなんだかそれだと本当に死んじゃいそうで恐かつた・・・・オレは未遂に終わらせるんだ・・・・死ぬんじゃない！ならば首吊り・・・・これの場合は、首を吊る紐をあらかじめ細く切つておけば実行の時にちょうど紐が切れてい

いだろりー！

しかし本当に死んでしまったら結構大変だ……ネットに書いてあった物には、首吊りをすると田や舌が飛び出るとあった……オレはそうなってしまったオレを想像した。なんともグロいのだろう……

でも、いつその事全てを捨てるつてのも有りかもしない。

自殺未遂を考えてからもう一週間も経つた。

そんな所に最悪な知らせが来た……九州からオレのいとこが来る事になつたのだそうだ。しかも期間は夏休みいっぱいまで。泊まる部屋はオレの部屋だそうだ……（ますます自殺くふり）をしにくくなつた……

ちなみに、オレのいとこは、オレと同い年の女が一人にまだ幼稚園に通つている男が一人。名前は、女の方が優、男の方が祐樹だ。そしてオレの部屋に泊まるのは優の方であつた……たとえ力一テンを引いたりしたとしてもオレと隣り合わせで寝る事になるのは間違いない。親は何を考えているんだ……いくら

「ちょっと死ぬのも悪くないかな？」とか思つてゐる人間だろうと中学生というのは男女の危ない関係に興味が生まれ始める時期なんだ！年頃の男と女を一緒に部屋で一人つきりにしていいわけがない。確かにオレに限つてそんな事をするとは思えないが、オレも男だ。優に手を出さないとは限らない！（それに優は結構かわいい……）

・

そんな思いもつかのまに、優達はやつて來た。最初はおばさん（優達の母）もいたのだが、優達を家におくと、

「帰りは福岡空港行きの飛行機に乗せておいてね！」とだけ言い、チケットを渡しておばさんは帰つていった……

「おばさんこんにちは～！たづくんもひつさしふり～！！元気だつた??」

出し抜けに優が聞いて來た。祐樹は恥ずかしそうに優の後ろに隠

れている。

「ほら！祐樹！ちゃんとおばさんご挨拶しなさい…」

優が祐樹をグイッと前に突き出した。

「こ・・・・こんにちは・・・・・」

優とは反対に小さな声で挨拶をする・・・・・

「さ、優ちゃん！荷物の整理でもしてきなー達男！手伝つてあげなさいー！」

はいはいーと適当な返事をし、オレは自分の部屋へと向かった・・・

部屋へ入るなり優はオレの机を漁り始めた。

「おい、何してんだよ？」

「え？いや・・・・この辺にエロ本でもないかなーって思つて・・・」

は？女がエロ本を探す？なんて趣味だ？・・・・人間性を疑う。

「ちょ、ちょっとー！そんな冷たい目で見ないでよー私はただたっくんの趣味を知りたくて・・・・それに私、たっくんの事好きなんだ！幼稚園の頃から・・・・ねえ知つてる？いとこ同士なら結婚出来るんだよ！だから今はその練・・・・」

オレは最後まで言葉を聞くのが嫌になり、部屋を勢いよく飛び出した。

死んでやる・・・・オレは優とは結婚できないーオレは優と結ばれていいはずがない！オレは・・・・優を幸せになんかさせられない・・・・・

この日の夜は家で寝なかつた・・・・友達の家に泊めてもらひついにしたのだ。

「そういえば達男、お前野球部の事どうなつた・・・・？」

あれ？なんでこいつがその事を知つているんだ？

「なんで知つてるかつて・・・・それ、達男が教えてくれたんじやないか！」

そう言つて彼はオレからのメールを見せる。

そうだった。オレは父親に怒鳴られた腹いせにこいつにメールを送ったんだつた・・・・・ま、今となつちやそんな事どうでもいい事だつたが・・・・

「でさ！達男！実はあのメールの内容な、掲示板からパクった文章なんだぜ！クククツ・・・・達男騙されてた？」

だからなんなんだ？別に掲示板からパクつたとか関係ないだろ・・・

「んだよー！なんか今日の達男ノリ悪いぞ！なんかあつたのか？つかなんでオレン家なんかに泊まるうと思つたわけ？」

優達の事を言おうと思ったのだがオレはやめた。

こいつに今、女の話しをするとやばいからだ（実は最近彼女にフラれたらしい・・・・）。

優のヌードを盗撮してきてくれとか頼まれたらまたもんじやない（まあ見たくないと言つたら嘘になるが・・・・）。

確かに優はかわいい。

でもそれは表面だけの事なんだ・・・・きつと今頃優は心の中でオレの事を馬鹿にしているんだろう・・・・今日の昼頃の事だつて、きつとオレを馬鹿にしてやつただけだろう。

人間、誰だつてそうなんだ・・・・どんな人間にだつて心は有る。オレにだつて、優にだつて、祐樹にだつて、俊樹（今、オレが泊まつてゐる友人の名前）にだつて・・・・いくら表面でいい子ぶつたつて所詮心の中は皆自己チューなんだ。オレだつてそうだ。自己チューなんだ・・・・人間なんて滅びればいい。皆死んじゃえばいいんだ・・・・オレも、優雅も、俊樹も、父親も、母親も、学校の先生だつて・・・・皆、死んじゃえばいいんだ。そうすれば、誰も苦しまない。

「たつくんはそれでいいの？」

聞き覚えの有る声が聞こえた。・・・・・優の声だ。

「ゆ・・・・優？」

「達男？大丈夫か？顔色悪いぞー！てか、ユウツて誰よ？？」

俊樹がオレの顔を覗き込む・・・

数分が経ち、オレは幻聴を聞いていた事が分かつた。しかし何故優の声だったのだろう?別に俊樹や、父親の声でもいいはずだが・・・

数分考えた結果、優の声はたまたま聞こえただけの偶然だということにした。

そして又数分が経ち、オレ達は寝床に着いた。

「たつくんは本当にそれでいいの?」

又だ・・・・・しかも又、優の声で。

「つお~! おい! 達男?」

オレは俊樹の声で我に返った。

「お! もしかして達男もとうとうクラスの女に恋したか!」

オレの学校は男子校だ! クラスに女などいない。

「あれ? 違つた? てか、もしかしてクラスの女の意味分かつてない系? ?」

「分かつてない系」

「・・・・・」

俊樹がオレに冷たい視線を送る。

「つたく、そんなんだから達男はオレしか友達がないんだよ・・・

・

「オ・・・・・オレにだつて友達はいるぞ・・・」

「誰?」

「え・・・・えーっと・・・・俊樹とか?」

「だからオレ以外にだよ! いないんだろ!」

確かにオレには俊樹以外の友達がいなかつた。始めの方は結構オレの周りにはつねに人がいた。しかし部活をサボり始めた瞬間、皆はオレを避け始めた・・・・・

「お前、今ちょっとでも死にたいって思つてるだろ?」

「・・・・・」

読まれたのか?

「Jの様子だと団星のよつだな・・・・・」

「し、死にたかったらなんなんだよーお前も一緒に死んでくれんのかよー」

「いいよ・・・・・」

「へ?」

「だから達男と一緒に死んでやるって言つてるんだよー」

「・・・・・正氣か?」

「ああ・・・・・」

まさか俊樹も死にたいのか?でもオレはどちらかとこつと自殺じやなくて

「自殺してやるがー!」つていう事を父親に見せ付けるだけでいいのだが・・・・・しかしこの機会を利用しない手はない!

「俊樹ー本当に一緒に自殺してくれるんだな?」

「おう!しかし一言、これは心中ではないからな!」

「神獸?もしかしてゲームの話してたの?」

またもや俊樹は冷たい視線を送る・・・・・

「達男、ふざけてるのか?」

「オ、オレは別にふざけてなんか・・・・・」

「ま、そう恐い顔すんなよ!で、決行はいつにする?」

やばい、もう俊樹は自殺ムードだよ・・・・・

「な、なあ俊樹!もう一回考え直したらどうだ?オレ達が死んだらきっと悲しむ人がいるんだ・・・・・」

「おい、今になつて何言つてんだ!そんなんだから部活も人間関係も中途半端になるんだよ!」

「オレは元々・・・・・死ぬ気なんて・・・・・」

「分かつたよ・・・・・・」

「へ?」

「オレだけで死ぬ

やつぱり、俊樹自身がもうこんな世界に飽きていたんだな・・・・・

俊樹と一緒になら、死んでもいいかもしない。いや、もう一緒に死

んでやる。

「たっくんなら、止められるよー。今なら間に合ひ

「もう何なんだよー！もうオレは死ぬって決めたんだー！」

「ほ、本当に？」

俊樹の顔がオレの目の前に迫る。

「あ、ああ・・・・・」

オレがそう言つと、充電をしていたオレの携帯が鳴つた・・・・・

「つたく、誰だよこんな時間に・・・・・」

携帯のディスプレイをみると非通知の文字が現れた。

「ま、非通知なら出なくてもいいか・・・・・」

そんな事をつぶやいていると、やがて携帯は鳴りやみ、代わりに留守電が入った・・・・・

「あ、たっくん？」「んばんはーー！優でーす！」

優つて誰だよって目で俊樹がにらむ・・・・・

「たっくん！そしてたっくんのお友達ー死んじゃダメだよー生きてればいい事がきっと有るよーあと、優に隠し事なんかしてもすぐ分かるんだからねー！」

俊樹が目を真ん丸にしている。俊樹は驚いているんだ。もちろんオレも・・・・・

「おい、なんで優つて奴は俺達が自殺ムードしようとしてる事知ってるんだ？つーか優つて何者なんだよ。達男の携帯にかかるって事はお前の彼女か何かか？」

「まさか！優はオレのいどこだよー！」

嗚呼、ついに禁断の事を言つてしまつた・・・・・くそうー！（つ

なつたら写真でもムービーでもなんでも撮つて来てやるー！
「そつか・・・・・いとこ」か・・・・・

あら？予想していた言葉と全然違うぞ？・・・・・いや、でも油断は禁物だ！いつ切り替えられるか分からぬ。

「なあ達男ー！」

「き、きたあーーー！」

「お前いつからオタクになつたんだ?」

「へ?」

「・・・・・・・」

又々、冷たい視線がオレを射る・・・・・

「い、いやだからオレは達男が『キターーー!』って言つたからそつ
言つただけで・・・・・」

「で、俊樹は本当は何が言いたかったんだよー」

「いや・・・・・やつぱし自殺なんてやめだ!なんかもつ馬鹿ひじく
なつてきた・・・・・」

「そ・・・・・そุดな!じや、おやすみ・・・・・」

そしてオレは深い眠りに着いた・・・・・

朝、すごい形相をした俊樹の母親に揺すり(?)起こされた。

「達男君、うちの俊樹知らない?」

「俊樹が、どうかしましたか?」

「それがねえ・・・・・・」

俊樹の母親の話によると、朝俊樹の母親が起きると玄関にいつも履いていた俊樹の靴が無かつたそうだ。初めは散歩にでも出かけたのかと思い、待っていたのだが、数時間経つても帰つて来ないものだからオレが何か聞いていないかどうか聞きに来たらしい。

しかし残念ながらオレは何も聞いていない。最後に聞いたのは自殺が馬鹿らしくなつたという事だけだ。もしそれが嘘でなければこれは自殺ではない。大丈夫だ・・・・・しかし、あの言葉が嘘だつたら・・・・・急がなきやまずい。もう手遅れの場合だつてある。その時オレは第六感つてやつを感じた。

「俊樹・・・・・・・」

オレがそう言つと、俊樹の母親は泣き崩れた。

「かあちゃん!腹減つた~」

すぐ後ろで声がする。

「飯まだ~?」

すると俊樹の母親は立ち上がり、俊樹に向かって歩き出した。

ようやく状況がつかめた俊樹は、

「かあ・・・・・か・・・・かあちゃん！朝勝手に出かけたのは悪かつたけどオレだってもう中一だぜ！別に心配する事なんてないから！」

あれから、オレは朝飯を御馳走になり、急ぎ足で家に帰った。優に会つて昨日の電話の件を問い合わせるために・・・・

家に着くとまだ優達は朝飯を食べている途中だった。

「あら！お帰りなさい！・・・・・達男、何か言う事無いの？」

「？？？？」

「今日、美濃屋先生から電話が有りました・・・・・何か言う事は？」

美濃屋先生というのは、オレの入っている野球部の顧問のことだ。美濃屋が最近オレが部活に出ない事を言つたのだろうか・・・・・

「別に言つ事なんてねえよ！で、先生何て言つてたの？」

聞きたくもないのに聞いてしまった・・・・・

「達男、あなた部活サボつてない？」

「・・・・・・」

「どうなの？」

「・・・・・・サボつてるよ・・・・・だから、何？」

「・・・・・・」

「何なんだよ・・・・・」

「どうして・・・・・嘘付いてたの？」

そんなの、部活辞めたらこの家を追い出されるからに決まってる・・・・・

「部活行つてるつて嘘付いてた時、どこに行つてたの？」

「図書館・・・・・」

本当は公園なのだが、嘘を付いた。

オレは嘘つき者だ。きっと自殺をした後行く所は地獄だろうな。

そこでエンマ様に舌を抜かれるんだ・・・・

「見つかって・・・・死んじゃダメだよー絶対・・・・

「!?

何者なんだ?」「いつは・・・・

「エラロイド」

「!?・・・・ああ祐樹か!エラロイドって何だよ
「わかんない!ただぱつと頭に浮かんだだけ・・・・

「祐樹・・・・」

何だか優は寂しそうに弟の名前をつぶやいたた。
プルルルル!

「電話か・・・・」

「はい?・・・・はい、はい、はい・・・・

「かあさん!どうかしたの?」

オレは暗い顔をしたかあさんに聞いた。

「・・・・・・」

かあさんは暗い顔をしながら言つた。

「俊樹君が・・・・死にました・・・・

「!?・・・・俊樹が、死んだ!」

「やつぱり・・・・」

「優、お前・・・・」

オレは俊樹が死んだというのにニコニコしている優にいた。

「でも、たつくんは死ないでね!・・・・・・

優はオレが俊樹の後を追つて死ぬとでも思つているのだろうか・・

「優は・・・・・

「一体何物何だ? そう聞こうとしたが声が出なかつた。

「私は・・・・・祐樹と血が繋がつていません・・・・お父さんや、

お母さんとも、繫がつていません

「

聞いてないのに優は言った。

「優ちゃん、そんな事は無いんだよー。ねばねんりせんと優ちゃんが生まれる所見たんだからねー！」

そうなのだ。オレと優は同じ口、同じ部屋で、ほぼ同じ時間に生まれたのだそうだ。

「本物の風見 優は・・・・・もう死んでいます、

「優が、優じやない？」

「そう、私は風見 優の・・・・・」

「ちょっと待つた！」

「？」

オレが待つたをかけたのは、別に何か言いたかったからかけた訳ではないのだが・・・・・なぜかオレはこの続きを聞くのが怖くなつた。

「何？たつくん？」

「いつが本当に優では無いのなら、オレはここにいたつくんなくて言われる筋合いは無い。

「お前は優じやない・・・・・」

「そうだけど・・・・・・

「なら、」

「なら？」

「なら・・・・・消えろ！..」

「！？」

本当はそんな事を言つつもりは無かつた・・・・しかし今までのオレと優の会話だったはずの会話が、オレと知りもしない奴としていたなんてと、思っていたらついあんな言葉を言つてしまつた。

「分かった・・・・・」

それだけ言つと、こいつはオレの方へつかつかと向かって來た・・・

・・・そして玄関へ・・・・・

そしてあいつは死んだ。医者が言つてはノイローゼか何かだそう

だ・・・・

俊樹が死に、優まで死んだ・・・・・しかも自殺・・・・俊樹は
一酸化炭素中毒で死亡。優はこのマンションから飛び降りて死亡・
・・・

そしてついにオレは追い込まれた。

部活のサボりが父親にまで伝わったのだ。

別にかあさんが言つた訳でも無く、祐樹が言つた訳でも無い・・・

・
それから、あいつが死んだ後、祐樹の母親が向かえに来て、祐樹
は九州に帰つて行つた・・・・葬式の予定も無いらしい。

そう、問題は父親なのだ！あのプロジェクトを決行するか？本当に自殺するか？

*

十一月一十日

ここにはオレの家が有るマンションの公園・・・・・公園のくせに
手入れがなく、まるでジャングルの様だ・・・・・
少し冷えるこの公園で、オレは夜明けの空をながめている・・・・

・
「さつ！行くか・・・・

そんな言葉を呴き、オレは歩き出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9447c/>

ネガティブに行くぜ！

2011年1月23日15時15分発行